

言語の本質——言語と文化との関わり合い（その二）

奈 良 毅

〔0〕はじめに

私が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所を定年退官し、清泉女子大学に移ってから、早くも一年が経ちます。その間に、私の中には次のような変化が一つ生じました。

即ち、退官前の私の学問的興味は、どちらかと言えば南アジア諸言語間の比較研究や個々の言語の記述研究、さらには日本語とそれら諸言語との対照研究などに向けられていたのですが、ここ一年ほどの間に、言語学本来の目的である人間言語の本質を考える方へと、向きを変えだしたのです。

そして、その方向へと歩を進めれば進めるほど、人間の有する心的実体としての言語と、人間が創り出す精神文化（この場合、思考過程と呼んだ方がより適切かも知れませんが）との間には、実に密接な相

関関係があるということを、ますます強く意識するようになっております。

そこで、私がこれまで考察してまいりましたことを、「言語の本質」と題する小論文の形にまとめましたので、世の識者の方々に提示し、御批判と御教示を乞う次第であります。

〔1〕言語の本質

〔1・1〕【言語的事実と現世的事実とは同一ではない】^①ということ、を、言語の本質の第一原則として挙げ、まずこの説明から始めたいと思います。

例えば、ある人が本の中に描かれている動物の絵を見ながら、断定的音調（イントネーション）で、「これはイヌだよ。」と発話したとします。^②「」内の表現は、言語学的術語を用いますと、『断定文』と

でもいうことになりましょうか。

しかし、よく考えてみますと、その発話者が「犬」と断定したものは、「現実の犬」ではなく、「犬の絵」であることは、言うまでもありません。したがって、より適切な表現としては、「これは犬（という動物）の絵だ。」と言うべきなのかもしれません。

では、一体何故、発話者が「……犬の絵……」と言わず、「……犬……」といったのでしょうか、あるいは言い得たのでしょうか。それは、発話者が、本に描かれている動物の絵に、現実の犬に見られるのと全く同じ特徴を認めたためではないでしょうか。

そして、この時発話者の頭の中に浮かぶイメージは、特定の色・形・匂い・大きさ・動きなどの諸特徴を伴った「現実の犬」のイメージではなく、それら諸特徴の中から匂いとか動きなどの諸特徴を捨象したもの、さらには大きさや色の特徴さえ捨象して出来たイメージであろうと想像されます。^③それは、他の動物には全くなく、「犬」にのみある特徴（言い換えるなら、すべての犬に共通して存在する特徴）を抽出して出来たもので、発話者が「本に描かれている動物」を「犬」と断定する根拠となったものに他なりません。

ついでながら、ここでのいう特徴とは「現実の犬」が有する全ての特徴のことではなく、ある動物が「犬」であるためにはへどうしても必要な、そしてそれだけで十分な条件としての特徴、ということを用意

味します。

ここでひとまず、発話者の認識過程に関する説明を整理して述べますと、次のようになりうかと思います。

まず、現実世界に存在する犬の発する情報波動が、発話者の感覚（視覚、臭覚、聴覚、触覚など）を通じてパルス信号に変換され、それが神経を通じて脳の言語分野に達します。すると、そこに達したパルス信号は、「現実の犬」の諸特徴に関する情報に再変換され、「犬」のイメージを創り出します。しかし、そのイメージ化された動物を、発話者が「犬」と判断することができたためには、言語分野の一部を占める「辞書領域」に、「犬」という項目と「必要十分条件」としての特徴（の束）が予め登録されていなければなりません。

なぜなら、言語分野に出来たイメージの持つ特徴（一つないいくつかの束）と、既に辞書の中の「犬」の項目のところに登録されている特徴（の束）とが比べられ、同一だと認定できた場合にのみ、発話者はそのイメージを「犬」と断定できるからです。

ところで、その際発話者が「犬」と断定したイメージは、「現実の犬」と密接な関係はあるものの「現実の犬」そのものではなく、ましてや目の見えない人の脳内に生じるイメージとはかなり異なるものである、ということは容易に想像されます。

また、発話者が何の気なしに、「私もイヌをいつびき飼ってみたい

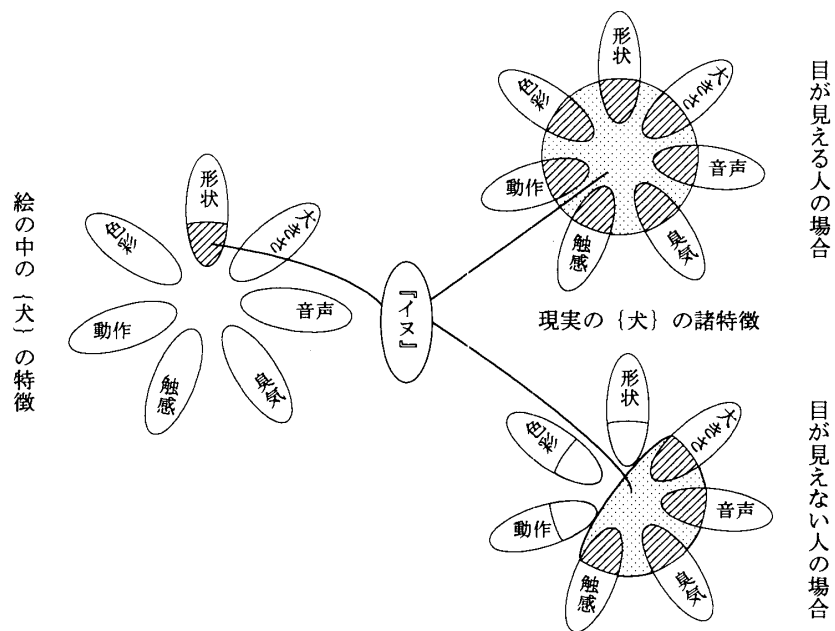
な。」と言った時のことを考えてみましょう。その際の発話者の脳内に生じたイメージは、特定の特徴（の束）を伴った「犬」であるかもしれませんし、あるいは単に必要十分条件としての特徴のみをもった「犬」であるかもしれません。

このように、発話者の頭の中に存在する【言語的事実】としての「犬」は、現実の世界に実際に存在する犬と密接に関わっている【現実的事実】としての「犬」と、同一ではないということが、ご理解いただけたことと思います。

ましてや、発話者が嘘を言っている場合のことを考えますと、現実には存在せぬ事物を意識的にイメージしているわけですから、なにをかいわんやであります。言語の本質の第一原則の意味することが、ますますはつきりしてくるのではないでしょうか。

〔1・2〕次に、【社会的・固定的部分と個人的・流動的部分の両面から成る】^④ということをも、言語の本質の第二原則として挙げたいと思います。

いったい、発話者の脳内辞書がどのようにして出来上がっていくのか、つまり各項目がどのようにしてつくられるのかを考えますと、当然ながら言語習得の過程と深く関わっていることを、思わないわけにはいきません。



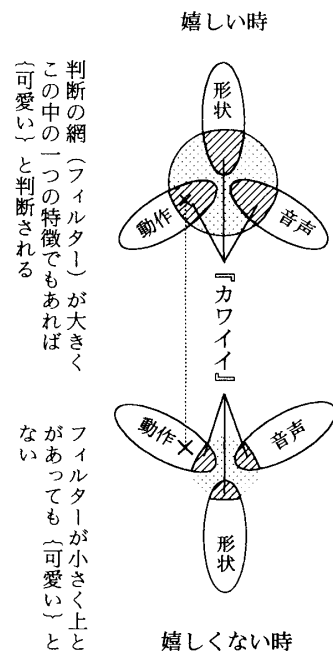
単語の登録は、おそらく『イヌ』という音韻と同時に、〈名詞〉という文法特徴や「犬」の意味特徴（の束）がまず入力され、何回かの修正や補正を経て次第に固定していくものと考えられます。しかし、日常私たちが使う辞書と違って、人間の脳内にある辞書は、他人の辞書

とかなり共通した固定部分をもっているものの、他人とは異なる固有の部分もまたあることを忘れてはなりません。

例えば、ある人が「このイヌはかわいいね。」と言ったとします。この文表現の中の「可愛い」という単語は、『カワイイ』という音韻特徴、〈形容詞〉といわれる文法特徴、〈犬〉にたいする発話者の感情や主観的価値判断を示す意味特徴、などを持っています。そして、この発話者の脳内辞書の「可愛い」という項目には、判断の根拠となった意味特徴（の束）が登録されており、他の日本人の脳内辞書にある同じ項目の内容と、ほぼ共通しているはずで

す。しかし、この意味特徴（の束）が、他人の脳内辞書の「可愛い」という項目にある意味特徴（の束）と、常に同じであるという保証はありません。何故なら、同じ犬を見ながら、ある人は「可愛い」と判断し、他の人々は「可愛くない」と判断していることが、よくあるからです。

つまり、判断基準は人によってまちまちであり、かなり個人的色彩が濃いばかりでなく、主観的・情緒的でさえあります。例えば、発話者の心情が楽しく嬉しい時と、反対に悲しい腹立たしい時とでは、対象物に対する判断基準が揺れ動くことがあります。つまり、発話者による「可愛い」の判断基準は、本人が嬉しい時には大幅に広がって甘くなり、たいていの犬を「可愛らしい犬」と判断するのではないでしょ



うか。しかしその反対に、本人が悲しい腹立たしい時には縮まって厳しいものとなり、どんな犬を見ても可愛らしいとは感じられないかもしれません。

それは、いわばカメラレンズの絞りの働きと同じで、光を通す穴が大きければ、少しぐらい暗い被写体でもはっきり写しますし、反対に穴が小さければ、ふつうの被写体でも薄暗く写ってしまうようなもの、と言えます。

このように、一人一人の脳内辞書は、他人との意志伝達に支障を生じない程度に類似しかつ固定的である部分と、他人と異なっている個性的であり、感情に従って揺れ動く流動的な部分との、二つの面から成り立っています。したがって、脳内辞書全体を一つの体系としてとらえた場合、個々人の脳内辞書は、それぞれとは異なるユニークな言語

体系である、と言えるのではないだろうか。

〔1・3〕 次に、【叙述・判断主体としての「主我」と動作・行為主体としての「客我」の二重性】を、言語の本質の第三原則として挙げたいと思います。

まず、次の二つの発話を比較することによって、叙述・判断主体を探っていくことにいたします。

A 「明日の朝十時頃、あんたの家へ行くから、それまでどこへも出かけずに待っていてね。」

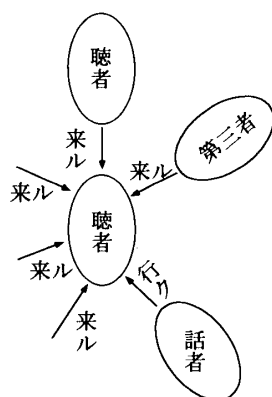
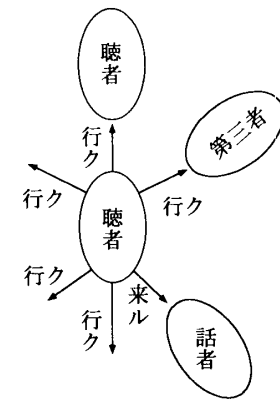
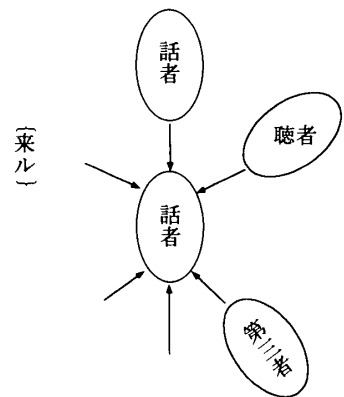
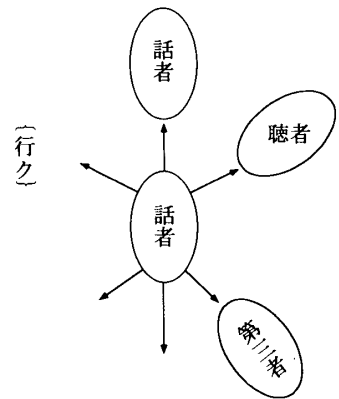
B 「明日の朝ちようど十時に、あんたの家へ来るから、すぐ出かけられるよう準備して待っていてね。」

右の二つの発話の動作・行為主体を明示すると、それぞれ次のような文になります。

A 「明日の朝十時頃、あんたの家へ《私が》行くから、《あんたは》それまでどこへも出かけずに待っていてね。」

B 「明日の朝ちようど十時に、あんたの家へ《私が》来るから、《あんたは》すぐ出かけられるよう準備して待っていてね。」

日本語の〈動詞〉「行く」と「来る」は、互いに相対立する概念で、前者は「話者のいる地点を起点とし、そこから誰かが遠ざかる」ことを意味し、後者は「話者のいる地点を終点とし、そこへ誰かが近づく」



ことを意味します。そして、この場合の「誰か」は、聴者でも第三者でもよく、さらに話者自身であつてもかまいません。

しかし、「話者のいる地点」を、「聴者のいる地点」とか「第三者のいる地点」とかに置き換えることはできません。何故なら、「聴者ないし第三者のいる地点を起点とし、そこから聴者ないし第三者が遠ざかり、話者のいる地点へ向かう」場合には、「行く」ではなく、「来る」を使わざるを得なくなりますし、「聴者ないし第三者のいる地点を終点

とし、そこへ話者が近づく場合には、「来る」ではなく、「行く」を使わざるを得なくなってしまうからです。したがって、日本語の動詞「行く」「来る」の用法は、あくまでも話者のいる地点を基準点として考えなければいけないことがわかります。

ところで、発話Aは、話者が明朝十時(話者のいる地点を起点とし、そこから離れて聴者の家へ向かう)ことを聴者に告げているわけですから、当然ながら「行く」という〈動詞〉を使っています。しかし、発話Bは、話者が発話Aと全く同じ行動をとるにもかかわらず、「来る」という〈動詞〉を使っています。何故でしょう。

もし、発話Bが正しい日本語の文であり、〈動詞〉「来る」の意味が〔話者のいる地点を終点として、そこへ誰かが近づく〕ことだとするならば、話者は聴者の家になければならず、話者自身がそこへ近づくのを見ていなければいけないことになります。つまり、話者(『この叙述者としての話者を「主我」と名付けます)がBを発話する時、話者(『「主我」の意識は瞬時にして聴者の家の地点に移り、そこへ話者自身(『この行為者としての話者を「客我」と名付けます)が近づくのを、心の中の目で見ているのです。⑤

言い換えますと、話者の「主我」が、意識の上で、話者の肉体の存在する地点から瞬時にして聴者の家のある地点に移り、しかも現在という時点から明朝十時という時点に移り、その地点に近づく自身(『

「客我」)を見て「来る」と発話をしたものが、Bなのです。

発話Aの場合は、意識の上で、現在から明朝という時間の移転のみが起こっているわけではなく、話者の「主我」の起点が、現在聴者と話している地点から明朝話者が出発する自宅へ移転していると考えるべきで、そこから離れて聴者の家へと向かうからこそ、話者は「行く」と言い得たのです。

ここで私は、「主我」と「客我」という発話主体の二つの概念を提示しましたが、常に叙述・判断主体となる前者はなかなか発話形式の中には現れず、動作・行為主体としての後者の方がよく現れます。

C 「そこへは私が行きますからご心配なく。」

D 「明日なら私も来ます。」

などの発話における「私」は、いずれも「客我」としての主体であり、「私が行く」ことや「私が来る」ことを叙述する主体としての「主我」は、ここには現れておりません。「主我」は、厳然として存在するにもかかわらず形式上には現れず、しかも時間・空間を超えて自由自在に移動しながら、すべての主体の動作・行為を叙述したり判断したりします。

最後に、ゲームに夢中になってなかなか御飯を食べようしない子供に向かい、母親が

E 「ぐずぐずせず、はやく御飯をいただいてしまいなさい。」

と言った場合の発話に見られる「御飯をいただいてしまいなさい」という表現について、「主我」の立場から説明して見たいと思います。

まず、「御飯」は、話者の「主我」が、「飯」は自分の生命を支えてくれる尊いものだとの認識から、それに敬意の接頭辞「御」を付したのではないかと考えることができます。

しかし、次の「いただいてしまい」の「いただく」という「動詞」は、「上位の人からある物を受け取る」動作を意味しますから、子供が「神、天地自然、お百姓さん達、あるいは両親などから受け取って食べる」ことと考えられますから、話者の「主我」が子供の立場に転移して表現していることになります。^⑥

最後の命令表現「なさい」は、明らかに母親の「主我」が子供に命令している形式です。

したがって、発話の主体である母親の「主我」は、まず「飯」に対して敬意を払い、次に子供の立場に移って「飯」を上位の尊い存在から受け取って食べることを想定し、最後に再び母親の立場に戻って子供にその行為をするように命令します。話者の「主我」は、このようにさまざまな立場に立ち、いろいろな主体の意志や感情を叙述しますが、形式には自らを現すことをしません。

話者が「この私としたことが、いつたなんでこんなへまをしでかしたんだろう」とか、「うん、我ながらよくやったわい」などと独り言

を言った場合、「客我」は「私」とか「我」という形式をとって現われますが、「主我」はやはり現われません。

「1・4」さらに【各民族特有の思考様式は、その民族の使用する言語形式に反映される】ことを、言語の本質の第四原則として挙げたいと思います。

前節において、私は、日本語の「行く」「来る」という「動詞」は、話者の「主我」の立地点を基準点にした動作・行為ではあるが、「主我」が時間・空間を超えその立地点を自在に転移し得ることを考慮に入れるべきだ、と説きました。

そして、これが日本語の「移動動詞」の一つの特徴であるとし、これとは違う特徴を持つ言語の使用例を示すことによって、民族毎に基準点の立て方が違うことと、その文化的違いが言語形式に忠実に反映されていることを、述べてみたいと思います。

さて、南インドで話されているドラヴィダ語族の中にタミル語という言語がありますが、現代タミル口語の「移動動詞」{po} {va} は、それぞれ日本語の「行く」「来る」にほぼ相当する意味を持っています。

しかしたとえば、第三者が自分の家を出て（歩いて・車で）話者の隣人N氏に会いに来た場合、日本人の話者だとおそらく「あの人は私

の隣家のN氏に会いに来ました。」と言うところでしょうが、タミル人は

E「あの人は私の隣家のN氏に会いに来ました(vā—ndaan)。」とも
F「あの人は私の隣家のN氏に会いに行きました(po—onaa)。」とも

も言う可能性があります。

もちろん日本人でも、もし第三者が話者の家へまず来て、それから隣家を訪ねたとしたら、Fの発話は可能となりますが、話者の家に寄らずに直接隣家へ行った場合、Fの発話を期待することはまず無理ではないでしょうか。

では、タミル人がどういう場合にEの発話をし、どういう場合にFの発話をするのかといいますと、話者がN氏を自分の親しい仲間と考えている場合はE、そうでない場合はFを発話することがわかります。つまり、タミル語の〈移動動詞〉{po—}と{vā—}は、単に「話者の存在点を起点として、そこから第三者が遠ざかる」か「話者の存在点を終点として、そこへ第三者が近づく」かの動作を示すだけでなく、(話者が隣家のN氏を仲間とみなしているかどうか)の心態をも示している、いうことができるのです。^⑦

このことは、さらにタミル語の一人称複数形に、包括形(naam「話者が聴者を含めて言う」「私達」と排除形(naankal「話者が聴者を排除して言う」「私達」)の二形式があることを想起することによって、一

層よく納得がいくのではないのでしょうか。

そして、タミル人の思考様式の特徴がよく現れている右の例は、民族の精神文化が言語と密接に関わり、その形式によく反映されていることを、立証しているとも言えます。

なお、言語の本質として、恣意性や分節性や線性的性質などにはまだ言及しておりませんが、追々取り上げていくつもりでおります。

〔註〕

①ここで言う【言語的事実】とは、(人間の脳内において、ある特定の音韻(ソシュールの significant に相当)とある特定の意味(ソシュールの signifié に相当)とが、社会習慣に基づく連合によって生じた心理的事実——具体的に「単語」とか「文」などを指し、【現世的事実】とは、(現実の世界に顕現する物体や現象(人間の肉体的・心理的現象を含む)の発する情報が、何らかの方法によって人間の脳内に入り、その結果生じた心理的事実——具体的には映像とか音印象などの「イメージ」を指します。以後、後者の場合、(現実の……)という表現で記述していきたいと思います。

②言語学者の論文に挙げられる文例の中には、言語学者の創作した恣意的なものが入っている場合があります。実際にそれが発話されるかどうか疑わしいものだ、という批判がよくあります。したがって、「これはイヌだよ。」という文がほんとうに発話されるかどうかということを、まず検証しておく必要があります。

例えば、ある人が、本の中に出ている動物の影絵を見ながら「これは何の動物だろう?」とつぶやいた時、これを聞いた隣の友人がその絵を見て、「これはイヌだよ。」と発話する蓋然性はかなり高いのではないのでしょうか。

③これは、発話者が目の見える人の場合のことで、もし目の見えぬ人であった場合には、その動物の体臭とか、体毛の手触り感覚とか、部分的な形とか大きななどの諸特徴が、「犬」のイメージを発話者の脳内に創り出すことでしょう。

このように、目の見える人の頭に浮かぶ「犬」のイメージと、目の見えぬ人の頭に浮かぶ「イヌ」のイメージとは、かなり異なったものだと考えられるのに、実際上両者間の意志伝達（コミュニケーション）にさほどの支障が生じないのは、何故でしょうか。それは、この二人が日本人である限り、「犬」と「イヌ」のどちらのイメージも「イヌ」という発音と連合する社会習慣が、二人の中にそれぞれ確立しているから、と言えそうです。

つまり、「犬」の諸特徴がパルス信号に変えられて発話者の脳内に入り「犬」ないし「イヌ」のイメージを創り出した時、間髪を入れずどちらも「イヌ」という音韻を連想させ、それが「イヌ」という音声となって出てくるのだ、と考えられます。

それは、あたかも、キーボードによって入力された情報が、コンピュータ内に組み込まれたプログラムに従って処理され、新しい図象として画面に現れ、プリンターにも出力されて出てくるようなものだ、と言えましょう。

④この考えは、ソシユールの説く「ラング」や「パロール」の概念と、いささか重なるところもありますが、必ずしも同じではありません。ソシユールは、signifiant（＝聴覚映像）と signifié（＝概念）の結合を signe（＝言語記号）と呼び、社会的・心理的な実体としての言語記号の総体を「ラング」、そして「ラング」を個人的に実際運用（発音を含む）したものを「パロール」と称しています。しかし、私がここで言う【個人的・流動的部分】とは、あくまでも発話者の脳内辞書のある部分の内容と運用に関する説明なので、から、「パロール」とは異なります。

⑤高橋正治氏が著書「古典曼陀羅—汝自身を知れ」（一九九四年教育出版セン

ター）において、一人称の二重性に言及しています。また時枝誠記氏は『國語と國文學』一五卷六號（東大國語國文學會昭和十三年）所収の論文「場面と敬辭法との機能的關係について」の中で、「話者による概念的把握の重點の置き方の相違」として説明を試みています。

⑥あるいは、もしかしたら、話者の「主我」が「神とか天地自然あるいは百姓さん達から受け取って食べる」ことを意味する、と考えることができるかもしれません。

⑦これらの文例や意味解釈は、筆者が、インド諸語中央研究所の元所長であり一九九五年九月から一九九六年八月までの一年間東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の客員教授をしておられたE・アンナマライ博士から聞き出したものです。

——一九九六・十・十五——

（人文科学研究教授）

described as described respectively as follows :

{go (=iku)}:—departing and moving away from the speaker's standing spot.

{come (=kuru)}:—approaching and reaching the speaker's standing spot.

Then how is it possible for any Japanese speaker to say either [A] or [B]?

[A] "I will go(=iki-masu) to your house tomorrow".

[B] "I will come(=ki-masu) to your house tomorrow".

The explanation becomes possible only if one postulates that for [A] 'Inner-Self' of the speaker will be at his/her own house tomorrow and see his/her 'Outer-Self' departing and moving away from the house towards the hearer's house and that for [B] 'Inner-Self' of the speaker will be at the hearer's house tomorrow and see his/her own 'Outer-Self' approaching and reaching the hearer's house.

Thus, the speaker's 'Inner-Self' can move freely transcending space and time and observe his/her own 'Outer-Self'. In most cases the former remains implicit while the latter is explicit and manifests itself in the form of the 'Subject' of a sentence.

When a speaker says to himself/herself "What a fool I am who failed to do such an easy thing!" or "O Great! I have done rather well, haven't I?", 'I' here indicates the speaker's 'Outer-Self' and the real one who states the sentence concerned is the speaker's 'Inner-Self' though not manifested in any linguistic form.

(4) A mode of thought peculiar to the members of a given speech community is closely interrelated to a certain linguistic form.

Modern colloquial Tamil motion verbs {po-} and {va-} have almost the same meaning as Japanese motion verbs {iku} and {kuru} respectively.

When a Japanese speaker notices someone visiting Mr. N, living in the speaker's neighbouring house, he/she may say

"That person came(=ki-masi-ta) to see Mr. N."

However, a Tamil speaker may say either [C] or [D].

[C] "That person came(=va-ndaan) to see Mr. N."

[D] "That person went(=po-onaan) to see Mr. N."

The reason for this linguistic discrepancy can be found in the speaker's mental attitude towards Mr. N. Namely, if this Tamil speaker considers Mr. N as his/her intimate friend or friendly neighbour, then he/she may utter the sentence [C]. But if the speaker does not consider Mr. N as a person belonging to his/her friendly circle, then he/she may utter the sentence [D].

The inclusion of someone in a speaker's mental circle or the exclusion of someone from it seems to be a characteristic form of cultural behaviour of the Tamil people. This peculiar mode of thought by Tamil people is reflected in the distinction between the two linguistic forms indicating 1st person plural:—i.e. inclusive {naam} 'we(=including the hearer)' versus exclusive {naankaL} 'we(=excluding the hearer)'.

What Is Language ? —Its Interrelation with Culture—

Tsuyoshi Nara

Human language can be defined as having the following characteristics:

(1) Linguistic reality differs from phenomenal reality.

It is supposed that within his/her own brain each human being possesses a unique mental dictionary registering a lemma of {dog}, for instance, with its semantic feature(s) as minimum requisite yet sufficient condition which is associated with the phonological sign called /inu/.

This lemma can be associated either with a living dog really existing in this mundane world or with a picture of a dog illustrated in a children's story book.

The mental image of {dog} consisting of certain semantic features registered within the cerebral dictionary of a blind person must be different from that within the dictionary of a person with eye-sight.

Thus, the image of {dog} existing in someone's cerebral dictionary—which I term as 'linguistic reality'—differs from the image of {dog} which is created in the brain due to the stimulation of pulse signals transmitted through nerve systems of various sense organs (such as the eye, ear, nose, skin, tongue etc.) from either a living dog or a toy dog or a picture dog etc.—which I term as 'phenomenal reality'—.

To support the above statement one may refer to the fact that human beings can tell a lie—namely, one can create an image of something which never exists in the phenomenal world.

(2) The cerebral dictionary has two aspects—a social & stationary aspect versus a personal & fluctuating aspect.

Sometimes it so happens that while a person sees a dog and think of it as a {lovely} dog on the basis of criteria associated with certain features, another person seeing the same dog judges it otherwise. In this case it should be so interpreted that one person's criteria differs from another person's.

Furthermore the criteria may fluctuate according to the mood or mental condition of the speaker at the time of his/her utterance. When the speaker is very happy, the applicable range of the feature(s) associated with the criteria of {loveliness} tends to expand and become loose—in this case the speaker may perceive almost every dog as a lovely dog. On the contrary, when the same speaker feels unhappy or angry, the range of criteria surely tends to contract and become rigorous—in that case any dog hardly looks lovely to the speaker's eyes.

It is presumed that semantic features of a given lemma registered in the cerebral dictionary of a person are almost the same as those of the lemma concerned in the cerebral dictionary of any other person belonging to the same speech community. Without this presumption no one can expect smooth interpersonal communication among the members who speak the same language.

Thus, it can be said that the cerebral dictionary contains a socially common & stationary aspect and also an individually unique & fluctuating aspect.

(3) The speaker gets involved with double egos—implicit or 'Inner-Self' and explicit or 'Outer-Self'.

The meanings of Japanese motion verbs {go (=iku)} and {come (=kuru)} are